



審査員特別賞

佐木隆三賞

## 「事件です」

巻田 小太郎

その日の朝、事件は、起こった。「ママ、大変なことになった！」出かけたばかりのお父さんが、あわて、家にもどって来た。ぼくは、リビングで、おもしろいテレビを見ていた。げんかんで、何か二人でさわいでいる。するとお母さんの「けい察」とか「どうなんどけ」「保証書」と言う聞きなれない、ぶっそくな言葉が耳にはいつて来た。ぼくは、テレビをそっちのけで、げんかんのぞいた。二人の会話から、大体のことは分かった。要は、お父さんの自転車が、ちゅう輪場からぬすまれたらしい。

そんな高級でもない、普通のママチャリだし、ブレーキは、「キーキー」うるさい音をたてるし・・・どうしてそんな自転車をぬすむのか、ぼくには、さっぱり分からない。

お父さんは、すぐ、どうなんどけを出しにけい察に向かった。お母さんは、何やらインターネットで一生けん命調べている。さすがにぼくも心配になって、お母さんに話しかけた。「だれがとったん？」お母さんは、完全に無視で「まずは、ぬすんだ犯人の心理を分せきしよう。」と、ひとり言を言っていた。お母さんのすい理からすると、犯人は、「悪い人」⇨「働かない人」⇨「ギャンブルをする」だから、パチンコ屋とか、けい馬場付近がありがたいと言っ予想だ。ぼくは、小さな声で「なるほど」とうなずいた。いつものお母さんより、とてもかっこよく見えた。まるで、名たんていの様だ。お母さんは、すぐに、お父さんに電話して、さがす場所を指示していた。今度は、お母さんが刑事に見えてきた。

2時間後、お父さんが、あせだくで帰ってきた。お父

さんの「ただいま」の低くつかれた小さな声から、まだ自転車が見つかっていないということが、どんかんなぼくにも分かった。

いくらおんぼろ自転車でも、お父さんにとっては、大切な足だ。犯人は、平気な顔でお父さんの自転車に乗っている。そう思うと、むしろようにはらが立って来る。犯人をにくいと思った。自転車がいないから、歩くしかないお父さん。あせびつしよりでクタクタで帰ってくるお父さんを想像した。ますます犯人を許せないと思った。

実は、ぼくには、こんなひみつがある。遊びに行った帰り、自動はん売機の近くで、百円玉を拾った。その時ぼくは、ラッキーと思って、そっとそれをポケットに入れてしまった。このことは、今でも家の人には、ぜったい内しよだ。ばれたら、きっと大変な目にあうことは、まちがいない。でもそんな事より、その百円玉の持ち主は、どんな人だったんだろう？ぼくと同じ小学生で、家の手伝いを毎日がんばってためた努力の結しようの百円だったのかもしれない。その子は、お金をなくした時、

本当にショックだっただろう。泣いてしまったかもしれない。それとも、小さな子がお母さんのたん生日プレゼントを買うための百円玉だったのかもしれない。お母さんをびっくりさせようと、おこづかいをためて、お店に買いに行く途中で、なくしてしまったとか。または、お母さんにおつかいをたのまれた百円かも。きっとすごく困ったんじゃないかな。お金がないと、買い物も出来ないし、家に帰ったらぜったいおこられるし。その子の事を考えると、自分のした事がだんだんこわくなってきた。それから、自動はん売機でジュースを買おうとして、最後の百円玉をおとしてしまい、それも見つからなくてのどがからからで、仕方なくあきらめたのでは？そんな大事な百円玉をぼくは、・・・今ごろだけ自分を許せないと思えてきた。

外で「キーキー」音が聞こえると、すぐベランダに出て確にんしてしまふ。そしてすれちがう自転車を、ジロジロにらむように、見てしまふぼくがいる。犯人は、今ごろどんな気持ちなんだろう。ぼくには、少しだけ分か

る気がするけど……。きっと明日には、もと通りに  
ちゅう輪場にお父さんの自転車がもどって来ていると信  
じた。だって昨日、ぼくが拾った百円玉を持って、自  
動はん売機まで行ったから。